慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 労働価値説の基本的考察 |
| Sub Title | |
| Author | 伊東, 岱吉 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1932 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.3 (1932. 3) ,p.455(79)- 489(113) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19320301-0079 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320301-0079 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、正に自然（筆者註、社會を含めて）の生命を規定する。（Engels, Dialektik und Natur. in: Marx-Engels Archiv. Bd. II. S. 189.）

又レーニンは、辯證法が認識の法則であり、同時に客觀的世界の法則なることを强調して後、次の如く述べて居る。

「對立物の同一性（恐らく對立物の統一の方がより正しいであらう、だが同一性と統一性なる云ひ表はしの差別はこの場合特に重要なものではない、或る意味に於ては、共に正しい）は自然（精神及び社會を含めて）の凡ゆる現象と進行にとつての矛盾に滿ちた、相互に排斥し、對立する所の諸傾向の認識（發見）を意味する。凡ゆる世界の進行をその自己運動に於て、その自發的發生に於て、その生々とした存在に於て認識する條件はそれ自體を對立物の統一として認識することである。」と。（Zur Frage der Dialektik. in: Lenin Sämtliche Werke. Bd. XIII. S. 375-376.）

附記　認識論一般の研究を課題とする所の理論經濟學方法論叙說に於て論ぜらるる可き問題は、なほ二つ殘つて居る。一つは認識論としての辯證法の思惟諸形式が如何なる論理的順序に於て配列されるかとの構成原理の問題、他はこの構成原理に從つて、思惟諸形式の移行を詳述することである。

# 勞働價値說の基本的考察

伊東岱吉

## 一

マルクス勞働價値說を中心とする從來の論爭に於て問題解決の障碍の一つは、マルクス價値概念の特質の看過であり、その價値概念より價値形態を取去つて價値の內容にのみ議論を限定する方法論的誤謬である。

價値論上に於けるマルクスの功績の最大のものは價値形態の分析に在り、彼れの價値概念の特質も亦此處に存する。蓋し、價値內容の分析に於けるマルクスの功勞は勿論これを見逃し得ぬが、この分析は、ウイリアム・ペティ、ポアギルベールよりリカアドオ、シスモンデイに到る英佛古典學派が不完全乍らも行つた所であり（註一）、マルクスが古典派經濟學の根本的缺陷の一つとして、その探求に努力したところのものは、價値形態の分析に外ならなかつたからである（註二）。價値形態とは商品生產社會に於て勞働生產物が取る社會的形態であり、物と物とが取り結ぶ社會關係であるが、この物と物との關係こそ、商品生產社會に於て人と人との社會關係が現はれる物的表現形態であり、

『資本制生産の仕方の・最も抽象的な・しかしまた最も一般的な形態』（註三）なのである。此價値形態に依つて、資本制生産の方法は社會的生産の特殊な一樣式として特徵づけられ、またかくして歷史的に特徵づけられる。マルクス價値概念が、歷史的・社會的概念たる特質を備ふる所以も亦此處に存する。勞働價値說論爭の究極的問題は、勞働と價値との必然的聯關の證明に存するが、マルクスが彼れの先人の試みて爲し得ざりし此問題を解決し得たのも、資本制生産の歷史的特徵より價値關係を理解せんとする方法に依るものであり、價値形態研究の成果である。

從つて、價値形態を問題の外に追ひやる限り、マルクス勞働價値說の根本的理解の鍵は失はれ、その特徵の大半は見棄てられる。此問題に關する吾國從來の論爭に於ても、價値概念に關する論爭の無際限ならん事を避けんが爲め、論爭の中心を交換比率決定因の探求に限定せんとする傾向があるが（註四）、かゝる限定に依つては、價値概念の中より、價値の形態は疎か、その內容の質まで捨象せられ、價値の量的規定性のみが問題とされることゝなつて、マルクス價値概念の理解を全く不可能ならしめるのである。價値形態とその內容との統一としてのマルクス價値概念を論議せずんば、マルクスの眞意は窺ふべくもない。論爭がかゝる價値概念を問題とせざる限り、マルクス以前の勞働價値說を論ずる結果となるであらう。筆者は、以上の理由より、マルクス價値概念を形態と內容との統一として把握し、資本制生産諸關係の歷史的社會形態よりこれを理解せんとするものである。

註一　Vgl. Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie, Kapitel I, A. 宮川譯第一章A「商品分析に關する學說史」參照

註二　Vgl. Marx, Das Kapital (Volksausgabe), Bd. I. S. 43-4. 河上、宮川譯（岩波文庫）一二〇—三頁

註三　a. a. O. S. 44.　同

註四　小泉信三「價値論と社會主義追補」參照　一二三頁

## 二

マルクス經濟學の對象は、一定の歷史的段階に於ける社會的生産諸關係である。『人間は生産に於て啻に自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の方法において共同に働き彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産せんが爲めには、彼等は互に一定の聯絡および關係に入り込み、且つ此等社會的聯絡および關係においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。』（註五）この人的相互關係が社會的生産諸關係である。故に、經濟學の對象は、人と人との關係であつて、人と物、物と物との關係ではない。而も、この人と人との關係は、生産諸力の發展に適合する歷史的關係であり、一定の歷史的形態を以て特徵づけられてゐるのである。一定の歷史的段階に於ける社會的生産諸關係は、複雜なる諸規定の總括としての具體物であるが、此諸規定の中には他の諸規定に對して支配的なるものがあり、これが社會的生産諸關係の歷史的特徵を形成するものとして、他の總ての諸規定を己れの色彩の中に浸してゐる。此歷史的特徵は『一の普遍的照明』であつて、これより出發せずんば、他の一切の諸規定はこれを理解することが出來ない。（註六）

註五　Marx Lohnarbeit und Kapital, S. 28. (Elementar Bücher des Kommunismus) 河上譯五二頁

註六　Vgl. Marx, Zur Kritik der politischen ökonomie. Einleitung, XLIII. 河上、宮川譯四六―七頁參照

經濟學の對象としての生産諸關係は、吾人には先づ混沌たる表象として現はれる。吾人は第一に、この具體物をその構成諸規定に分析せねばならぬ。經濟學は實驗の力を藉りることは出來ないから、思惟の上で、抽象力に依りこれを爲さねばならぬ（註七）。この抽象力により、表象された具體物より次第に稀薄な抽象物に進んで行き、最後に、最も單純な概念に到達する。そこから逆に後方の旅を辿つて、終に再び具體物に歸るのであるが、かくして得られた具體物は、最早、混沌たる表象としてのそれではなく、多くの諸規定と諸關係とよりなる一個の豐富なる總體性としての具體物である。かくして對象は初めて把握され得る（註八）。

註七　『經濟的諸形態の分析にあたつては、顯微鏡も化學的試藥も役には立ち得ない。抽象力が兩者に代位せねばならぬ』（Marx, Das Kapital, Bd. I, S. XXXVI. 河上、宮川譯一〇頁）

註八　Vgl. Marx, Zur Kritik der politischen ökonomie, Einleitung, S. XXXV-XXXVI. 河上、宮川譯序説三四―六頁

然し乍ら、玆に注意すべきは、かくして得られたる抽象的範疇とは、單なる抽象的範疇ではなく、具體物を浸透してゐる歴史的特徴の最も單純な表現であると云ふ事である。此點にマルクスの抽象方法の特徴が存し、彼れの先人と峻別さるべき區別が存する。彼れにあつては、具體と抽象とは別個のものとして切り離さるべきではなく、抽象は常に具體の一面として、具體を前提してのみ、存し得るのである。從つて、マルクスが、具體物より單純な範疇を抽象する場合には、この抽象的範疇は具體物の特徴を備へ、具體的總體性を前提としてのみ存在し得るのである。故に、抽象的範疇は生命なき骨片ではなく、生ける具體的總體性の一面として生きてゐるのである。經濟學の對象たる生産諸關係は一定の歴史的社會形態を有するものであるが故に、經濟學が分析し以て後方への旅の出發點となすところの・抽象的範疇は、此特徴を失つては居らぬ。否、寧ろ此特徴そのものゝ最も單純且つ一般的なる表現である。資本制社會を分析して得られたる最も抽象的な範疇は商品であつたが、その價値形態こそ資本制社會の歴史的特徴の最も單純なるものに外ならぬ（註九）。辯證法的抽象の限界は、經濟學にあつては、對象の歴史的社會形態を捨象してはならぬと云ふ點に存する（註一〇）。かゝる方法に立てばこそ、マルクスの價値概念は、歴史的・社會的概念なのである。マルクスは、單に交換の量的比率を説明せんが爲めに、價値論を研究したのではなく、資本制生産の歴史的社會形態を解明せんとして價値論に這入つて行つたのである。故に、彼は價値の量の問題に止まらず、質の問題を取り上げ、更らにかゝる內容の問題に止まらずして、價値の形態を問題としたのである。

辯證法は、對象の本質自體のうちに、それ自身の矛盾を見出すものである。故に、抽象せられた單純なる範疇は、それ自身のうちに具體的總體性の矛盾を含んでゐる。自然的形態（使用價値）と社會的形態（價値）との統一としての商品は、それ自身のうちに資本制社會の矛盾を藏してゐるのである（註一一）。

註九　Vig. Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 44. 河上、宮川譯一二三頁參照

註一〇　『抽象を使用するに際しては、豫め抽象の限界に關する基礎的問題、即ち何から抽象することができ、また抽象しな

ければならないか、そして何から抽象してはならぬかといふ問題を解決しなければならぬ。研究對象そのものから抽象してはならぬ、即ち一方では、抽象は究極にまで徹底的に行はれねばならぬが、他方では、一定の限界を超えてはならない。』（ローゼンベルグ、直井武夫譯「註解マルクス資本論」—第一卷ノ一—五三頁）

註一一　イー・ソインシュテインは、マルクスの功績を物的諸範疇のうちに人間の生產諸關係を看取する社會學的方法にありと主張するイー・ルービンの所說を反駁して、次の如く述べてゐる。『マルクス獨特の功績は、イー・ルービンの考へるやうに、「社會學的方法」を經濟學の中に導き入れたことにあるのではなく、辯證法的方法を導き入れたことに存する。……マルクスの方法を特徵づけるものは、何よりもまづ、事物の本質そのものゝうちに矛盾を發見することである。』（「イー・ソインシュテイン、直井武夫譯「マルクスレーニンに於ける辯證法」一〇〇—一頁）

事物の本質のうちに矛盾を見出す辯證法的特徵を忘れることは勿論正しくないが、物神崇拜性を解明したマルクスの社會的・歷史的觀點の特異性を重要視する事も、忘れてはならぬ。

然らば、マルクスの先行者、古典學派の抽象方法は如何なるものであるか。マルクスの抽象方法の辯證法的なるに對し、彼らの特徵は、その機械論的なるに在る。古典學派は、對象たる社會的生產諸關係の歷史的社會形態を見ず、『資本制生產の仕方を社會的生產の永久的自然形態だと見誤』つた（註一二）。辯證法的抽象にとつては、對象の歷史的・社會的特質が抽象の限界であつたが、古典學派はかゝる限界をも飛び超へて抽象方法を推し進めたのである。故に、彼等にとつては、抽象的範疇は、歷史的社會形態をも失へる自然永久的なるものに外ならなかつたのである。彼等の價値概念は、歷史的・社會的概念ではなく、價値の內容、特に量的關係のみを含む。今日社會の歷史性を看過するものにとつては、價値形態の神祕は解き得ず、價値形態の神祕を解き得ざるものにあつては、この內容が何故に彼の形態を取るかの問題—勞働と價値との必然的聯關—は矢張り一個の神祕である。故に、古典學派は價値の內容を發見したが、その發見は單に偶然的たるに止まり、何等それに對して必然的論證を爲し得なかつたのである（註一三）。

註一二　Marx, Das Kapital, Ed. I. S. 44 河上、宮川譯（岩波文庫）一二三頁

註一三　a. a. O. S. 44 河上、宮川譯一二〇頁

古典學派の代表理論家、リカアドオに於ても事情は同じである。彼れは勞働の量と交換比率との聯關を自然價格論に於て證明したが、此證明は、兩者の聯關の單なる經驗的認識に止まり、その必然的證明とはなり得なかつたのである。ハインリッヒ・ディーツェルが Die klassische Werttheorie und die Theorie von Grenznutzen (Jahrbücher für Nationalökonomie u. Statistik, Neu Folge, 20. Bd. 1890) に於て述べたるが如く、リカアドオに於ては、勞働は單に相對的稀少性の原因としてのみ價値の原因たるものに過ぎなかつた。此處に、マルクスとリカアドオとの勞働價値說の根本的相違點が存し、リカアドオの生產費說への轉向の根據が存する。稀少性の原因は勞働のみとは限らない。勞働は相對的稀少性の最も明瞭なる要因たるに過ぎない。故に、かゝる觀點に立つ限り、稀少性の他の要因が現はるれば、それを認めざるを得なくなる。かくて、リカアドオは、勞働の外に「時」の要因を導入して生產費說への道を作つたのである。

價値の要因は效用と稀少性とであり、效用學派は稀少の絕對的なると相對的なるとを問はず、一切の財貨に共通しうる說明を與ふるものであり、生產費說は相對的稀少財を說明し、勞働價値說は

費用の中の最も明瞭なる一要因―勞働を强調するものに過ぎない、とのディーツェルの折衷の可能性は、リカアドオの機械論的方法のうちにその根據を持つ。價値の社會的・歷史的性質を看過して勞働を單なる費用の一要素、即ち稀少性の一原因として取扱ふものにとつては、勞働價値說が生產費說へ轉向するのも、費用說が效用說と折衷されて、今日の折衷說に發展する過程も、必然的である。リカアドオより生產費說、效用說を經て折衷說に迄到る系統を、マルクス勞働價値說と對立せしむることが許されるならば、前者を一貫する特徵は其方法の機械論的なる點に求められる。

マルクスが、資本制社會の歷史的社會形態より價値を問題とし、その內容―勞働を理解したのに對して、彼等は、かゝる歷史的社會形態より獨立に價値概念を構成し、勞働を單なる費用の一要素として、稀少性の一原因として取扱ふ。マルクスが、價値の量のみならず、質及び形態を問題とするに反し、彼等は專ら量的關係にのみ重點をおく。マルクスが、勞働生產物の價値關係即ち物と物との關係の背後に、人と人との關係を見出すのに對して、彼等は、物と物との關係を物と物或ひは物と人との關係としてのみ解するのである。一定の歷史的段階に於ける生產關係を研究すべき經濟學が、その歷史的社會形態を無視することの方法論的に誤れるは言を俟たぬ。然し乍ら、理論の是非を決定すべき審判者は事實である。かゝる觀點より出發する經濟學が、現象の背後を貫く社會的必然を解明しうるや否やに、その評價は懸つてゐる。

筆者はマルクス價値概念の特質の重要性を認め、以下に於て、資本制生產の歷史的社會形態よりマルクス價値概念を考察せんとするものである（註一四）。

註一四　マルクス勞働價値說の特質に留意し、勞働と價値との必然的聯關を、これより論證せんとする試みも屢見受けられるが、唯物辯證法、唯物史觀に對する無理解は往々にして、見當違ひと思はれる結論を生むに到る。故に吾人は、かゝる觀點よりマルクス價値概念を考察する場合、マルクスの方法論的立場に充分注意せねばならぬ。此誤謬の一例としては、フランツ・ペトリを擧げうる。（Franz Petry, Der soziale Gehalt d.r Marxschen Werttheorie, 1916）

ペトリが、古典學派とマルクスとの方法論的相違を、前者の物的自然的なるに對し、後者の社會的歷史的なる事に求め、マルクス價値論の特質を、その社會的方法―物的關係の背後に人と人との關係を見出す方法―に見出さんとする試みは、確かに注目に價するが、マルクスの社會的・歷史的立場に獨乙理想主義哲學の先驗的要因を見出して、これをリカアドオの自然主義的・實證的方法と對比せしむる新カント派的解釋には贊成することは出來ぬ。ペトリが、マルクスの社會的・歷史的立場を、彼れの唯物辯證法と切り離して、此處にカント的要素を見出し、彼れの唯物論的方面と對立せしめ、以てマルクスを二元論となす見方は、唯物辯證法並びに唯物史觀の根本的誤解に立脚する。かゝる新カント派的立場に禍ひされて、彼れは、勞働と價値との必然的聯關の證明を、マルクスの人類靈長論的思想に求むるに到つたのである。人間勞働は、他の生產手段に比しては、何等か特殊なものであつて、勞働生產物は、かゝる特殊な意味を有する勞働の所產であり、倫理的人格の對象化である、との見方より、勞働と價値との必然的聯關を見出さんとせるは、正しき解釋とは認められぬ。

吾國に於ても、嘗て、河上博士が價値人類犧牲說なるものを述べられたことがあつたが、これも勞働と價値との必然的聯關を、誤れる方法論的認識より出發して論證せんと試みたものゝ一例である。これは、發表後、櫛田氏の批評に會ひ、博士自ら直ちに撤回せられたものであつた。

## 三

以上述べたるところにより、マルクス勞働價値說は、これを資本制生産諸關係の歷史的特質より理解すべきこと、並びに勞働と價値との必然的聯關も此理解に依り解決さるべき事を吾人は了解した。故に、これより勞働價値說の理解に必要なる限りに於て、資本制生産諸關係の歷史的社會形態を解剖せねばならぬ。

此問題に關しては、資本論第一卷第一章第四節、『商品の物神崇拜的性質とその秘密』(Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis) が、最も敎示に富めるものである。マルクスはその中に於て、『商品生産の基礎に於て勞働生産物を包むところの、商品世界のすべての神秘すべての魔法妖術は、それゆゑに、吾々が他の生産諸形態に逃避するや否や、直ちに消滅する』(註一五) と述べて、商品生産の特質を理解せしめんが爲めに、吾人を、明るい島のロビンソンの生活を振り出しに、暗いヨーロッパの中世に導き、農民家族の地方族長的産業を廻つて、最後に、共有の生産手段をもつて勞働するところの、そして多くの個人的勞働力を意識的に一つの社會的勞働力として支出するところの、自由人の團體に案内する。何故マルクスが、吾人をしてかゝる巡禮をなさしめるのか。その眞意は次に存するものと思はれる。

（一）商品生産社會に於ては、人的生産諸關係は物的關係として現象するに反し、他の生産諸形態にあつては、それはかゝる物的媒介を經ずに直接露出してゐる。從つて、他の生産諸形態との比較研究は、今日のかゝる特殊形態より生ずる物化意識—物神崇拜—より吾人を解放し、物的關係は、畢竟するに人的關係の特殊な現象形態に外ならぬことを理解せしむるに役立つ。

（二）商品生産社會の歷史形態は、結局、各歷史的段階を貫徹する自然法則の特殊な現象の仕方に外ならぬ。然るに、彼の物化意識は、この特殊な歷史的形態それ自身が、永久的自然形態たるかの感を抱かしめる。各歷史的段階の巡禮は、吾人をして自然法則の何たるかを認識せしめ、今日の特殊形態の特殊形態たる所以を知らしめる。この二つの理由より、マルクスは、各人にかゝる巡禮をなさしめて、商品生産の歷史的形態の特質を把握せしめんとしてゐるのである。而して、吾人に物神崇拜を起さしめる商品生産諸關係の特殊形態は、勞働生産物の價値形態であり、この價値形態は又彼の自然法則が商品生産社會に於て取る特殊な現象形態でもあるのである。

玆に云ふ自然法則とは、自然的・物理的乃至純技術的なるものではなく、社會的な法則であり、社會的生産諸關係が存續する爲めの不可缺の前提である。自然法則そのものは、總ての社會的生産諸關係に共通する抽象的規定・生産一般に關する規定である。若しも研究がかゝる生産一般に止まるならば、如何なる生産諸關係も理解され得ない。蓋し一定の歷史的段階は歷史的特質を有するものであり、自然法則は、この歷史形態の衣を纏つて現象するからである。故に、一定の歷史的段階を理解せんが爲めには、かゝる歷史的特徵を理解せねばならぬが、然しこの事は、生産一般の理解の不必要を意味するものではない。寧ろ、特殊形態それ自體が永久的自然形態たる外觀を呈する場合、この外觀を引き剝いで、それの歷史的たる所以を示す爲めには、自然法則の認識は頗る重要である。マルクスがこの點を强調しなかつたのは、かゝる生産一般は自明の理であり、且つ古典派經濟學はこの研究にのみ止まつてその缺點を露呈してゐることを痛感せる爲めであらう(註一六)。筆者

は、自然法則の理解は歷史的形態の理解の前提であり、更には勞働價値說の理解にとつて、甚だ肝要であると信ずる。故に先づ、自然法則其自身を考察して、然る後に、その歷史的形態に入らうと思ふ。

註一五　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 40.　河上、宮川譯(岩波文庫)一一三頁

註一六　古典派經濟學が自然法則にのみ止まつて、その缺點を露呈したとは云ふものゝ、マルクスの自然法則と古典學派のそれとを同一視してはならぬ。この相違は、以下に於て、マルクスの自然法則の展開せられるに從ひ、明らかとなるであらう。

## 四

生產に於て人間が互に入り込む生產諸關係は、これを社會經濟的生產諸關係と勞働技術的生產諸關係との二つに分つことが出來る。而して、兩者は統一せられて、茲に一般歷史的段階の社會的生產諸關係を構成してゐるのである。社會經濟的生產諸關係とは財產關係及び階級其他を意味するものであり、勞働技術的生產諸關係とは、社會經濟的生產諸關係の物質的生存諸條件であつて、社會的分業及び工場やマニュファクチュア內の勞働組織等を意味する(註一七)。生產諸力は純技術的なるものゝみではなく、人的相互作用の一定の仕方—社會的關係—それ自身も亦一つの生產力なのである。即ち、生產諸力と生產諸關係は一部分に於て交錯し、生產諸力の一部分は生產關係の一部分でもある。そして、この交錯せる部分こそ勞働技術的生產諸關係である。換言すれば、勞働技術的生產諸關係はそれ自身、社會的方面より考察した場合の生產力に外ならない。ブハリンの誤謬は、生產力と生產諸關係とを別個のものとして切り離し、『生產力と生產諸關係との間の矛盾は、二種類の生產諸關係の間の矛盾、即ち社會の生產諸關係に存する內的矛盾』(註一八)たる事を認識せざりし點に存する。社會經濟的生產諸關係は勞働技術的生產諸關係より發生し、その一定の發展段階に對應してゐると云ふ點に、二種類の生產諸關係の統一が存する。

註一七　勞働技術的生產諸關係と社會經濟的生產諸關係との區別と、その取扱ひ方は、主に、マルティノフ『社會の可動的均衡および社會と環境との間の交互關係』(廣島定吉譯、白楊社版「ブハリン唯物史觀」批判に收めらる)に依つた、但しマルティノフはプレハノフに從つて、勞働技術的生產諸關係を『生產過程における生產者の直接なる關係(例へば工場やマニュファクチュア內の勞働組織)』と解して、社會的分業をこれより除いてゐる。筆者はマルティノフの主張するところと同じ理由に基いて、社會的分業をもこれに加へ得ると考へる。蓋し、社會的分業それ自身一つの生產力であることは、ドイツチェ・イデオロギー中でマルクスの認めるところである。其處に於て、マルクスは、社會的關係を『多數個人の相互作用』と云ふ意味に解し、『相互作用のかゝる仕方は、それ自體ひとつの「生產力」である』と述べてゐるが、社會的分業、社會的勞働の組織は明らかに此の『多數個人の相互作用』に含まるべきものである。更らに、マルティノフは、『社會經濟的生產諸關係が、分業から、即ち勞働技術的生產諸關係から發生する』と述べ、これにつづいて『階級分裂の根柢をなすものは、分業の法則である』とのエンゲルスの文句を引用してゐるが、此の場合の分業とは、社會的分業をも意味するものと解するのが當然であらう。

註一八　マルティノフ、前揭論文　八五頁

マルクス勞働價値說の基礎におかれた、前述の自然法則とは、かゝる勞働技術的生產諸關係を貫くべき、一定の秩序であつて、これが商品生產社會に於ける特殊形態に現象する時、それは價値法

則に外ならぬのである。然らば、勞働技術的生産諸關係を貫くべき一定の秩序とは何であるか。

（一）社會的生産に於ては、人間は一定の社會的勞働の組織に入り込み、何等かの仕方に於て相互の爲めに勞働し合はねばならぬ。故に、彼等の個人的勞働は必ずや社會的勞働とならねばならぬ。換言すれば、各個人の勞働は何等かの仕方に於て社會的分業の一肢體を構成せねばならぬのである。

（二）社會的分業は、社會的欲望の質と量とに應じて、一定の質的編制、並びに量的編制を有する。從つて、社會的總勞働量は、何等かの仕方で社會的分業の質的・量的編成に向つて比例的に配分されねばならぬ。この事は社會的生産過程として存續して行く爲めには、絶對的に必要である。

（三）然るにかゝる比例的配分の不可缺の前提は、配分さるべき社會的總勞働量を構成する個人的勞働が、質的差異並びにその個人的特殊性の捨象を經て社會的に平均せられ、同一單位に還元されて社會的平等勞働となつて居らねばならぬと云ふことである（註一九）。

註一九　イー・ルービンは、社會的勞働の組織を構成する勞働の徴表を、（一）社會的勞働（二）配分勞働（三）社會的平等勞働の三點に歸してゐる。（イー・ルービン、河野重弘譯、マルクス體系における抽象的勞働と價値―「マルクス經濟學の根本問題」共生閣版參照）

以上の事は、これを交換の媒介なき統制經濟に就いて考察すれば、最も明瞭に看取せられる。統制經濟に於ては、

（一）個人的勞働の社會的勞働への轉化は、何等の媒介をも經ずに、個人的勞働の特殊性のまゝ直接的に行はれる。

（二）社會的總勞働量は、統制者の手に依り、意識的に社會的欲望の體制に向つて配分せられる。

（三）此配分に際して、個人的勞働の社會的平等勞働への還元は、客觀的社會過程―例へば交換過程―に於てゞはなく、統制者の腦裡で行はれる（註二〇）。

註二〇　（一）個人的勞働の社會的勞働への轉化、と（三）個人的勞働の社會的平等勞働への還元、とは上述の說明に於ては、一見、矛盾するものゝ如くである。蓋し、（一）に於いては個人的勞働が其特殊性のまゝ社會的勞働となるに反し、（三）に於ては、個人的勞働は特殊性を捨象せられて社會的平等勞働となるからである。然し乍ら、（三）に於ける個人的勞働の特殊性の捨象は、單に統制者の腦裡に於てのみなされるのであつて、社會的過程に於ては起らないのである。而も、（一）に於ける、『媒介』なる語は、社會的過程による媒介を意味するものであつて、腦裡に於ける媒介作用を意味するものではない。故に、（一）と（三）とは何等矛盾せぬのである。（一）に於ける、『何等の媒介をも經ず』なる文句は、統制經濟を交換經濟と對比せしめる時、初めて意味を持つて來る。交換經濟に於ては、交換と云ふ社會的過程の媒介を經て初めて個人的勞働は社會的勞働に轉化するからである。更に此社會に於ては、個人的勞働の社會的平等勞働への還元も亦、此社會過程の媒介に依り、人間の意識より獨立して行はれる。勞働の質差及び、個人的勞働の特殊性を捨象して、これを社會的に平均化する過程が、統制者の腦裡に於てゞはなく、人間意識より獨立した社會的過程により行はれると云ふことのうちに商品生産社會の一特殊形態が存するのである。

## 五

### （一）個人的勞働の社會的勞働への轉化　（二）社會的總勞働量の社會的欲望に向つての比例的配分

（三）個人的勞働の社會的平等勞働への還元とは、如何なる社會的生產諸關係をも貫徹せねばならぬ自然法則として、マルクスの呼ぶところのものである。此思想を表白する重要な資料は、一八六八年七月十一日附のクーゲルマン宛てマルクスの書簡であつて、レーニンは夙に、『勞働價値說に對するマルクスの見解を、頗る含蓄多く說明してゐる』（註二一）ものとして、マルクス研究者の注意を促してゐる。かゝる注意の下に、マルクスの文獻を見る時には、クーゲルマン宛の書簡を俟つまでもなく、初期の『哲學の貧困』以來、常に暗默の裡に、その勞働價値說の基礎に、此自然法則がおかれて來たものであることを知り得る。然し、彼の述作を通じて、此自然法則其れ自體に關する叙述は殆んどなく、あつても極めて暗示的にしか述べられては居らぬ。故に吾人は、マルクスの暗示的叙述よりこれを組立てゝ行かねばならぬ（註二二）。

註二一　Marx, Briefe an Kugelmann, Einl. zung v. Lenin, S. 6. (Elementar Bücher des Kommunismus)

註二二　上述の自然法則の叙述も、筆者の解釋に止まる。

『一年と云はず、唯數週間でも、勞働が停止された場合には、如何なる國民と雖も死んでしまふであらうことは、どんな子供でもよく知つてゐる。同じく、種々なる欲望に適合する諸々の生產物の數量は、社會の總勞働の種々なる、且つ量的に規定されたる、數量を必要とすることも、周知の事である。社會的勞働の比例的配分のかゝる必然性は、社會的生產の一定の形態により揚棄されるものではなく、寧ろ單に、其現象の仕方を變ずるのみであると云ふことも自明である。自然法則は總じて揚棄され得ざるものである。歷史的に異れる形態の下で變ずるものは彼の法則が貫く形態のみである。そして、社會的勞働の聯絡が、個人的勞働生產物の私的交換として行はれるところの社會狀態に於て、かゝる比例的配分が貫徹されるその形態は、正にこれら生產物の交換價値である』（註二三）

註二三　Marx, Briefe an Kugelmann, S. 53-4 (Elementar Bücher des Kommunismus)

此書簡に於ては、勞働の比例的配分が自然法則として强調せられ、自然法則の歷史的形態としての交換價値勞働生產物の價値形態の意義が略述されてゐる。然し乍ら、勞働の比例的配分とは一體何を意味するか。如何なる場合を比例的と云ひ、如何なる場合を失比例的と云ふのか、換言すれば、勞働配分の均衡を貫く秩序とは如何なるものであるか、に就いては、以上の叙述は何等これを說明せず、唯、子供でも知つてゐる自明の理として片附けてゐるに過ぎない。筆者が自然法則として擧げた第一のもの、即ち個人的勞働の社會的勞働への轉化は、比較的自明であるが、此問題は決して自明の理ではない。故に、吾人は自らこの均衡を貫く秩序を導き出さねばならぬ（註二四）。

註二四　自然法則の第二、個人的勞働の社會的勞働への轉化の問題は、勞働配分の前提であり、比例的配分を貫く秩序の解明の際に說明する。

さて、此問題に於いては、一方に社會的欲望があり、これに對して、他方に配分さるべき社會的勞働がある。先づ、前者から考察して行かう。

充足さるべき社會的欲望は一種類ではなく、多種多樣であつて、而も『各欲望の範圍は量的に異るものであつて、一つの內部的紐帶により、相異つた量の欲望が、原生的の一體に連結され』（註二五）

てゐる（傍點筆者）。

註二五　Marx: Das Kapital, Bd. I. S. 301.　高畠譯第一卷第一册三三五頁

此處に引用する資本論の一節に於て、吾人が奇異な思ひをするのは、マルクスが欲望を互に量的に關係せしめてゐると云ふ事である。商品分析の場合に於けるマルクスの論法（註二六）を以てすれば、量的比較は質的統一を前提として初めて可能である。質的差異の下に於ては量的比較は問題となり得ない。上述の引用文に於ては、マルクスは明らかに諸欲望を量的に觀察し量的比較を行つてゐる。即ち、彼れは、社會的欲望を統一的觀點から觀察し、質的に統一せられた欲望を問題としてゐる譯である。更に、社會的欲望體制を構成する各部門が、夫々一定範圍を有して、相互に均衡狀態にあると云ふ事自身、欲望の質的統一を前提せずんば考へられぬ事柄である。蓋し、かゝる均衡の規準は、一に各部門の欲望滿足の均等―社會的勞働の一單位量により得られるところの欲望滿足の均等―に存するからである。思ふに、かゝる考察の仕方は此引用文を俟つまでもなく、マルクスが勞働配分法則を問題とする場合、常に行つてゐるところのものである。諸欲望を以上の如く取扱はずんば、これに向つて、社會的總勞働量を比例的に配分するなどゝ云ふ事は全く問題となり得ない。蓋し、比例とは量的問題であり、諸欲望が夫々質的に相違して量として問題となし得ざる狀態にある場合には、全く考へられぬことであるからである。然らば、社會的諸欲望の質的差異を捨象すれば一體何が殘るであらうか。是に於て、吾人は、マルクスの使用價値なる概念では問に合はなくなつたことを認めざるを得なくなる。諸欲望の質差を捨象して、同一單位に還元する場合、マルクスの使用價値に代るべきものは效用である。而も、社會的欲望に對應するものなる以上、墺國學派の問題とする個人的效用ではなく、社會的效用でなければならぬ（註二七）。

註二六　Marx: a. a. O. S. 16. 河上、宮川譯前揭書六四頁

註二七　社會的效用とは何であるか、これと個人的效用との關係如何、の問題は頗る難問である。社會的效用の理論を樹立したものには、クラーク（Clark, The Distribution of Wealth, A theory of wages, interest and profits, 1899）及び、彼れの祖述者セリグマン（Seligman, Social Element in the theory of Value, Quarterly Journal of Economics, Vol, XV. 彼れは社會的效用を平均的評價―社會が値打ちありと考へるところのもの―と呼んだが、後に Principles of Economics ではその部分を削除してゐる）がある。クラークの社會的效用の理論は、個人の場合をそのまゝ社會に移したものであるが、個人より出發して社會を說明せんとする墺國學派の方法に對して、社會全體より出發せんとせし方法は注目に價する。『……若し全社會が、實際上一人の人の如く行動するならば、その社會はあらゆる貨財につきかやうな測定を爲すのであつて、多くの測定者が存するといふ事實から起る面倒は消滅する。實に市場はかゝる結果を保障するものである。蓋し社會は一單位として―恰も一個人的買手の如く―活動するからである。』傍點筆者―Clark, Distribution. p. 380. 林要譯四九五頁。）

マルクスに於ても、ロビンソンを以て社會に置き換へる類似の論法が見出されるが、價値に對する效用の作用に關しては、かゝる限界效用學派の發展理論とは全く相異るものたることは、後述するところである。資本制社會の對抗的分配關係による・社會的欲望の現象すべき歷史的形態の・甚だしき歪みに關しても、クラークは、これを全く問題とせぬ。更に根本的相違點は、クラークが限界原理に立つて社會的欲望を考察するに反し、後に述ぶる如く、マルクスは平均觀察に立つと云ふことである。筆者は、社會的效用其自體に關して多くの疑問を感ずるものであるが、此場合、社會的欲望の質的統一が問題なのであり、社會的效用の問題に逢着せざるを得ぬのである。

マルクスは資本論冒頭の商品分析に於て、『使用價値』を次の如く規定してゐる。

『ある物の有用性、すなはち人間の何等かの種類の欲望を充たすその性質は、その物を使用價値たらしめる。しかしこの有用性は空中に浮んでは居ない。それは商品體の諸屬性によつて制約せられてをり、商品體なくんば存立しない。だから、鐵、小麥、ダイヤモンド、等々の如き商品體そのものが、一の使用價値あるひは財なのである。……諸々の使用價値の考察に當つては、例へば何ダースの時計、何エルレのリンネル、何トンの鐵、等々といふやうに、常にその量的規定性が前提せられる。』（傍點筆者）（註二八）

註二八　Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 4 河上、宮川譯（岩波文庫）三八―九頁

マルクスはかくの如く使用價値を規定するが故に、使用價値は物そのものとなり、使用價値量は、『何エルレのリンネル、何トンの鐵』といふやうな、物の量となる。從つて使用價値の質的統一は行れず、使用價値量は有用性の程度とは比例しない。蓋し、有用性の程度は、效用遞減の法則に從つて、物の量の增大に伴ひ相對的に遞減するからである。商品の中に、自然的形態と價値形態との矛盾の統一を見出したマルクス辯證法よりは、かゝる使用價値規定はその當然の歸結であつて、かく規定したことそれ自身を誤れりとなすものではないが、かゝる使用價値規定の外に、有用性の程度を、效用を、問題とせねばならず、又これを問題とすることは、彼の勞働價値説を何等損ふものではなく、マルクスが立ち入つて分析せざりし社會的欲望の秩序を説明するものであり、寧ろ、マルクスの足らざる所を補綴する所以であると筆者は考へるのである（註二九）。

註二九　此場合の補綴とは折衷の意味ではない。價値及び價値量があくまでも抽象的人間勞働、社會的平均勞働時間であつて、この規定に社會的效用の一分子だに導入することを許さざる所以は後述するところである。效用の理論は社會的欲望に關する限り利用されうるのみであつて、價値に對しては、その成立又は實現の前提となる以外、全く無力である。

更らに、マルクスが『使用價値』なる言葉を二樣の意味に用ひてゐる事を想起するのは、上述の事情を考察する上に有意義である。彼れは『使用價値』を以て、一般的には、物の自然的性質―物そのものを意味するものとして用ひたるに反し、特殊の場合には、社會的欲望の範圍を現はすものとして用ひてゐる。即ち、個々の商品に就いてゞはなく、特殊な社會的生産部門のその時々の總生産物に就て語る時、マルクスは、各特殊部門に對する社會的欲望を、Gebrauchswert auf gesellschaftlicher Potenz『社會的自乘に於ける使用價値』（高畠譯）と呼んでゐる。

『個別的商品の使用價値は、各商品がそれ自身に於て一の欲望を充足せしめるといふ事實に懸るのであるが、社會的生産物大量に於ける使用價値は、此等の生産物が各特別種類の生産物に對する量的に限定された社會的欲望を充すに適してゐるといふ事實、隨つてまた、量的に限定されたこの社會的欲望に應じて勞働が相異つた生産諸部面間に比例的に配分されるといふ事實に懸る。……社會的の欲望、語を換へていへば社會的自乘に於ける使用價値は、この場合相異つた特殊の生産諸部面が社會的勞働時間の上に幾許づゝ分擔するかを決定するものとして現はれる。が、法則は依然として個別的商品の場合に示したところのものと同一である。即ち、商品の使用價値は、交換價値

隨つてまた價値の前提たるものだといふ法則、これである。この問題が、必要勞働と余剰勞働との割合に關係して來るのは、若し、その割合が破られるとすれば、商品の價値隨つてまたそれに含まれる余剰價値が實現され得なくなるといふ限りに於いてのみである。』（傍點筆者）（註三〇）

註三〇　Marx a. a. O. Bd. III, 2. S. 155-6. 高畠譯第三卷下一七六

この引用文は、勞働分配法則に關する幾多の敎示を含めるものであるが、使用價値をかゝる『社會的自乘に於ける使用價値』と解する時には、それは、既に、物それ自體、及び物の量ではなくなる。此關係は、供給の過剰並びに過少の場合に明瞭に看取される。蓋し、社會的欲望の範圍と供給量とが不均衡となつた場合には、『物の量』としての使用價値量は供給量に一致するが、『社會的自乘に於ける使用價値』は供給量に一致せず、寧ろ社會的欲望範圍に一致するからである。『社會的自乘に於ける使用價値』なる言葉を使用せざるを得なくなつたことは、勞働配分を問題とする限り、冒頭分析に於ける使用價値の規定では間に合はなくなつた事を示すものである。此場合、マルクスは『社會的自乘に於ける使用價値』を社會的欲望の一定の範圍と考へてゐるが、これを嚴密に規定すれば、社會的欲望それ自身ではなく、寧ろそれに對應する、生産物自身に屬する有用性であり、社會的效用に外ならぬのである。

社會的效用を取扱ふ場合に於て、常にマルクスの眼前に思ひ浮べられてゐたものは、均衡狀態に於ける社會的欲望の體制である。即ち、社會的勞働の單位量に對して擧げられる各種欲望充足の均等と云ふことを規準として組立てられた社會的欲望の體制である。而して、各種生産物の社會的自乘に於ける使用價値、即ち社會的效用の總量は、常に、此均衡に依り割當てられた社會的欲望の一定範圍に依つて決定せられる。假りにリンネルの部門を一例として考察すれば、リンネル總量の社會的效用は、其供給の大小にかゝはらず、リンネルに對する社會的欲望の範圍により一定してゐるものである。從つて、供給が過剰になつても、社會的效用の總量は一定してゐるものであるから、過剰部分だけは無駄になつたのも同じであつて、各個當りの效用は、一定した社會的效用の總量を供給量で除したるもの、即ちその可除部分に外ならぬ。『もしも、市場の胃の腑がリンネルの總量を、一エルレにつき二シルリングといふ正常價格で、吸收することができないならば、この事實は、社會的總勞働時間の余りに大なる部分がリンネル機織の形式において支出されたことを、證明する。その結果は、個々のリンネル織工のいづれもが、彼れの個別的生産物の上に、社會的に必要な勞働時間以上のものを費したのと、同一である。こゝでは Mitgefangen, mitgehangen 「一緒に捕へられたものは一緒に絞殺される」といふ諺があてはまる。市場に於ける總てのリンネルはたゞ一個の商品と看做され、その各片はたゞその可除部分とのみ看做される。そして實際また、個々の一エルレの價値はいづれもみな、社會的に規定されたる同一の分量を有つた一樣なる人間勞働の體化物に外ならぬのである。』（傍點筆者）（註三一）

註三一　Marx a. a. O. Bd. I. S. 68. 河上、宮川譯前掲書一七一—二頁

此引用文に於ては、上述の考へ方が明瞭に現はれてゐる。即ち、社會的效用の全體量を一定せるものと前提して、各單位の效用はその可除部分として看做されると云ふ考へ方がこれである。此處

にも、マルクスの平均觀察の特徴が見出され、限界效用學派の限界原理と著しい對立を示すのである。"Mitgefangen, mitgehangen." なる諺は、このマルクスの考へ方を最も端的に表現するものに外ならぬ。彼れも、一個當りの社會的效用を問題とする時には、效用の遞減を認める。然し乍ら、此遞減は限界效用の遞減ではなく、平均的效用—社會的效用總量の可除部分—の遞減である。而も、此遞減は、常に一定した社會的全部效用の前提の下にのみ考察されてゐる。全部效用を一定したものとする考へ方は、社會的欲望體制の均衡狀態を前提としてのみ生じて來るものであつて、彼れが、社會的效用、社會的欲望を問題とするのは、常に勞働配分の思想の下に於てゞあると云ふ事を想起すれば、此考へ方は肯定しうるのである。かゝる全體的立場と平均觀察とは、效用を取扱ふ上に於て限界效用學派よりマルクスを峻別すべき重要なる特徴であると思はれる（註三二）。

註三二　勞働配分を問題とする限り、マルクスの全體的立場は容認せられ得る。然し乍ら、效用に關する平均觀察と限界原理との問題は、これでは解決され得ない。筆者は未だ、これを論ずべき素養を持たないが、以下に於ては、マルクスの平均觀察を一應容認して論を進める。

以上に於て、勞働の均衡的配分が行はれる爲めには、先づ、社會的欲望の側に於て、質的統一が行はれ量的比較が可能となつて居らねばならぬ事、從つて社會的效用が問題とされる事が明らかとなつた。

然るに、社會的勞働の側に於いても、事情は同じである。比例的に配分されんが爲めには、個人的勞働の特殊性が統一せられ、勞働の異質性の還元がなされて、此處に量として問題となしうる樣になつて居らねばならない。

『裁縫勞働と織物勞働とは、質的に異なる勞働である。けれどもまた、同一の人間が交互的に裁縫したり機を織つたりしてをり、從つてこれら二つの異れる勞働の仕方はたゞ同一個人の勞働の變形にすぎないで、まだ異れる個人の特殊的固定的な機能とはなつてをらず、それは恰も、現代の裁縫師の今日作つた上衣と翌日作つたズボンとが同一な個人的勞働の單なる變化を前提するのと、全く同じやうになつてゐるところの社會狀態がある。それから一見すればすぐ解かることだが、今日の資本家社會においては、勞働需要の方向の變化するにつれて、人間勞働の一定分量がかはるがはる、あるひは裁縫勞働の形態において、あるひは織物勞働の形態において供給されてをる。勞働のかゝる形態變化は、磨擦なしには行はれ得ないであらうが、しかしそれは行はれざるを得ない。しかるにもし吾々が、生產的活動の規定と、從つてまた勞働の有用な性質とを、度外視するならば、それに殘るところのものは、それが人間の勞働力の或る支出であるといふことである。裁縫勞働と織物勞働とは、質的に異なる生產的活動であるが、兩者ともに、人間の腦髓、筋肉、神經、手、等々の生產的支出であり、且つかゝる意味において兩者ともに人間勞働である。……人間勞働とは、特殊な發達を遂げてゐないあらゆる普通の人間が平均的にその生きた有機體のうちに有つてゐるところの、單純なる勞働力の支出である。單純なる平均勞働そのものは、異つた國々と異つた文化時代とでは、もちろんその性質を變ずるが、しかしある特定の社會では與へられてゐる。複雜勞働は、自乘された、またはむしろ倍加された單純勞働と看做され、從つて複雜勞働のより小なる分量は單

純勞働のより大なる分量に等しくなる。かゝる換算―還元―が絶えず行はれてゐることは、經驗が示す。』（傍點筆者）（註三三）

註三三　Marx. a. a. O. S. 11-12. 河上、宮川譯五三―五頁

資本論冒頭に於て、價値形成勞働の特質を說明する此引用文に於ては、勞働配分の必然性が論ぜられる（註三四）と同時に、吾人が玆に問題とするところの、配分さるべき社會的勞働とは如何なるものであるかゞ述べられてゐるのである。即ち、それは先づ、質的差異を統一せられた、單純なる人間勞働、言葉を換へていへば、前述せる自然法則の第三のもの、社會的平等勞働でなければならない。

註三四　此引用文に於ては、資本制生產と對比して社會的分業未發達の社會形態が述べられてゐるが、幾分なりとも、社會的分業が存する限り、勞働の比例的配分法則の貫徹は必然的である。

かくて、勞働の均衡的配分が可能となる爲めには、社會的欲望と社會的勞働との双方に於て、質的統一、同一單位への還元がなされて、此處に量的比較が可能となつて居らねばならぬ。このことは、統制經濟を想像する時には明瞭に看取される。社會的總勞働が未だ同一單位に還元されざる、異れる個人的勞働の異質性のまゝのものゝ集合に過ぎぬ場合には、嚴密なる配分は不可能である。更にその配分に際し、A部門に投ずべきか、B部門に投ずべきかを決定するに當つては、必ずやA、B兩欲望を量的に比較するの必要に迫られるであらう。

## 六

さて、かく觀じ來れば、勞働の比例的配分を貫くべき秩序は容易に見出される。社會的欲望の體制に向つて、量的に限定された社會的總勞働量を配分せんとする場合、如何にせば最も合理的であるか、これが問題なのである。換言すれば、勞働を均衡的に配分すると云ふ場合、何と何とが均衡するのか、均衡の規準は何れの點に存するか、の問題である。此場合、限界效用理論を覗いたことのあるものには、彼のゴッセンが欲望滿足に關して述べ（註三五）、後世學者が呼んでゴッセンの第二法則となすところのものであり、その後の限界效用理論の中心的法則となつたところの、限界效用均等法則（又は限界效用水準法則）が想起されるであらう。

註三五　Vig. H. H. Gossen, Entwicklung der Gesetze des Menschlichen Verkehrs und daraus fliessenden Regeln für menschliches Hand.ln. 3. Aufl. 1927. S. 12-28. S. 33. S. 38-45.

限界效用均等法則は個人的消費秩序の法則である。即ち、『最少費用、最大滿足』の原則に從ひ限定せられた購買力を以て、吾人が自己の欲望體制を滿足せしめんとするには、各支出單位に對して平等なる限界效用が擧げられ得るやうに購買力を配分せねばならぬ。支出各單位に對してAB兩貨物の限界效用が等しくないならば、限界效用のより小なる方の購入を減じて、より大なる方の購入を增し、かゝる行爲は、兩者の限界效用が均等となるまでは止まない。かくて初めて、最少の費用を以て、最大の效果を收め得るのである。從つて、價格が與へられてゐる時には、價格は支出量を示すが故に、該貨物の限界效用の高さは、價格の高さに平衡するに到る。即ち各個人の欲望の體制は、價格を前提として組立てられる事となるのである。限界效用學派は、個人的主觀より出發して

社會的過程たる價格を說明せんとしたのであるが、交換經濟に入り來るや、說明は正に逆倒せねばならなくなる。蓋し、限界效用均等法則は、個人の欲望を、寧ろ逆に價格より說明するものであるからである。かくて、限界效用學派は價格構成を限界效用より說明せんとして、價格を前提するの循環に陷つたのである。社會的過程は、云ふまでもなく、社會的個人の意識的行爲の合成果であるが、意識的行爲の結果は必ずしも意圖せし所とは一致せず、その結果は寧ろ意識より獨立せる社會的過程として、必然的法則に支配せられ、逆に意識を規定するものとなる事は唯物史觀の論證するところである。個人は社會的過程により制約を受けて社會的個人としてのみ存するが故に、限界效用學派の如く孤立人より出發すれば社會的過程の分析は不可能となり、社會的個人より出發すれば、說明すべき社會的過程それ自身を前提する結果となつて循環論に陷る。クラークが個人的主觀より出發する方法を棄てゝ社會全體より出發し、平衡論がかゝる因果的效用說を棄てゝ循環を相關々係として認むる如き、何れもかゝる欠陷に應ぜんとするものに外ならない。

客觀的・社會的立場に立つマルクスが、かくの如き主觀的・個人的方法を排斥することは云ふまでもないが、社會を統一的經濟主體として、全體的に見る場合には、便宜的・雛型的譬諭として、個人的生活を引き合ひに出す事は尠くない。即ちロビンソンの孤立的經濟は、往々にして、統一的經濟主體としての社會を說明するには此上もなき良き雛型であるからである。然し乍ら、かゝる便宜的譬諭としてのマルクスのロビンソン物語と、墺國學派のそれとを同一視してはならぬ。蓋し、前者は、社會全體より出發して個人を說明し、社會過程そのものゝ分析より始める。故に、そのロビンソン物語は、社會全體を一個人に置き換へた譬諭に過ぎぬのであるが、後者にあつては、個人より出發して社會過程を說明せんとするものであつて、そのロビンソンは、かゝる譬諭には非ずして社會を構成する個人そのものであるからである。

さて、限界效用均等法則に一定の修正を加ふれば、その根本思想は、マルクスの勞働配分の均衡を貫く秩序を解明するところのものとなる。即ち、個人を社會に置き換へ、限界原理に代ふるに平均觀察を以てし、個人的限界效用を取り除いて、平均的社會效用を導入すれば、一切の用意は整ふのである。個人的消費秩序に於ける購買力は、社會的勞働配分に於ては、社會的總勞働量に、前者に於ける個人的欲望の體制は、後者に於ては社會的欲望の體制に、そして最後に、前者に於ける與へられたる價格は、後者に於ては、生產力の一定發展段階に依つて規定せられた、一個當りの、社會的必要勞働時間（技術的）に該當することゝなる。かゝる代置をなせば、あとの事情は兩者相等しい。

個人的欲望體制が、價格を前提として組立てられる如く、社會的欲望體制も社會的勞働時間を前提として構成せられるのである。蓋し、社會的欲望體制を構成する各部門が、夫々一定の範圍を有して、相互に均衡狀態にある時、この均衡の規準となるものは、社會的必要勞働時間の同一單位に對して得られる社會的效用の均等と云ふことであり、究極的には社會的勞働時間そのものであるからである。

かくして構成せられた社會的欲望に向つて、社會的總勞働量を均衡的に配分すると云ふ事は、各

支出勞働單位に對して、均等なる社會的欲望の滿足が得られるやうに配分する事を意味する。すなはち、各產業部門に投ぜられた支出勞働單位が均等なる效果を擧げ得る樣に、勞働は配分されねばならぬ。支出勞働の一單位が擧げうる社會的效用とは、該部門の社會的欲望の總量を、支出勞働の總單位數で除した可除部分に外ならない。假りに、勞働配分が均衡を失してA部門には供給が過剩であり、B部門にはそれだけ（A部門に過剩なだけ）過少であるとすれば、支出勞働の一單位が擧げうる社會的效用は、A部門に於てはB部門よりも小となる。故に、A部門に於ける過剩部分は、B部門に向けられ、この移動は、勞働一單位當り社會的效用が兩部門に於て等しくなるまでは止まぬ。而して、兩者の等しくなれる點は、勞働配分の均衡せる點である。

一例として統制經濟を想像して見よう。統制經濟に於ては、社會的欲望は、そのまゝ露はに表現せられ、資本制社會に於けるが如き特殊形態は有たぬ。技術的必要勞働時間を前提としての、社會的欲望體制の組立ても、明瞭に看取される。此欲望に向つての勞働の比例的配分は、價値法則と云ふが如き盲目的平均法則に依らず、人間の意識的統制に依り行はれる。而して、勞働配分の均衡・不均衡の規準は各種生產物一個當りの技術的必要勞働時間と平均的社會』效用との均衡に求められるのである。是に於て次の如き疑問が起るかもしれない。『統制者の勞働配分計劃は、單に各生產物の需要表に從つて建てられるのみであつて、かゝる必要勞働量と效用との均衡の如きは問題とならぬ』と。然し乍ら、此場合需要表に現はれた各種需要の範圍が、一定の均衡を保てる所以は、各種生產物單位當りの技術的必要勞働時間と社會的效用との均衡以外には求められぬのである。故に生產力の進歩が不均衡に行はれ、一生產物の社會的必要勞働時間が減じたとすれば、均衡は破れて該生產物の需要量は增し、その生產は增加する。而して、此增加は、減少せし社會的必要勞働時間に、遞減し行く平均的效用が均衡するまでは止まない。此場合、勞働配分の上には、變化が惹起される場合もあれば、然らざる場合もあり得る。蓋し、社會的必要勞働量が減じたのであるから、從來の配分比例のまゝでも、該生產物の供給は增加しうるからである。從つて、丁度、それだけの增加量で前記の均衡が得られる場合には、勞働配分は變化せずに濟む譯である。

勞働配分の均衡・不均衡は、各生產物の社會的平均效用と社會的必要勞働時間との均衡・不均衡に現はれる。然るに、社會的平均效用は、勞働配分の如何—供給量の如何—により可動的なるに反して、社會的必要勞働時間は配分の如何よりは獨立し確固、不動のものである。故に、配分の誤りのバロメーターとなり、その終局的規制者たるものは後者であつて、前者ではない。社會的必要勞働時間よりの社會的平均效用の背離は、飽までも勞働配分の不均衡の指標となつて、均衡的配分を招來せずんば止まない。以上の考察は限界效用均等法則の修正とは云へ、これの中心思想の上に立つ。限界效用學派のかゝる考へ方が、却つてマルクスの勞働價値說を支持し、補綴するものであることに驚かされる。併し、限界效用學派は、此法則に於いて、循環論に陷らざるを得ないと云ふ事情を想起すれば、不思議は消え失せる。補綴とは折衷を意味せず、終局的規制者は常に、技術的意味に於ける社會的必要勞働時間であり、社會的欲望は被規制者である（註三六）。

註三六　此論點に於いて、筆者は大熊信行氏の『マルクスのロビンソン物語』解釋には贊成しかねる。

［『經濟學はロビンソン物語を好むから先づロビンソンの島の生活を見よう。彼れは生れながらにして淡白寡欲な男ではあるが、それでも樣々な種類の欲望を滿足せしめねばならぬ、そしてそのためには、……樣々なる種類の有用勞働をなさねばならぬ。……さて彼れは、彼れの生產機能の種々雜多であるに拘はらず、それらが同一なるロビンソンの異なれる勞働形態に外ならず、從つて人間勞働の異なれる仕方に外ならぬことを、よく知つてゐる。必要そのものが彼れを强制して、彼れの時間を彼れの異れる諸機能の間に正確に配分せしめる。彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占め、どの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする效果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる。……ロビンソンと彼れ自身の創つた富たる諸物品との間のすべての關係は、此場合極めて簡單明瞭であつて……しかもなほこれらの諸關係のうちには、價値のあらゆる本質的な規定が含まれてゐるのである。』（傍點筆者）（Marx, Das Kapital, Bd. I. S. 40. 河上、宮川譯一一三頁）

此一文の中には、ロビンソンの生活を便宜的譬諭として、上述の勞働配分法則が、甚だ暗示的に述べられてゐるが、玆に問題とするところは、傍點の個所のみである。大熊氏は此個所を批評して次の如く論じてゐる。

『ここに「克服すべき困難の大小」とは支出すべき勞働力の大小の意味であり、したがつてそれは配分さるべき勞働時間の相對的分量即ち各範圍の意味に外ならない。……吾がロビンソンの活動諸部門に配分さるべき勞働時間の範圍の大小を決定するものは何か。それは「目的とする利用上の效果」を得るために必要とする勞働時間の範圍の大小である。――だがこれは殆ど同義反復ではあるまいか。マルクスにおける同義反復は、わづかに「目的とする利用上の效果」といふ言葉の積極的な一解決によつてのみ救はれる。即ち、勞働配分の規制者は、勞働そのものゝみに存するのではなくして、勞働諸部門においてその配分を要求しつゝある「利用上の效果」であるといふことが、マルクスに依つて幾分なりとも指示されてゐるからである。これこそ實にカール・マルクスに於ける配分理論の極限である。』（大熊信行「マルクスのロビンソン物語」七一頁）

即ち、マルクスのロビンソン物語に於ける一句『彼れの總活動の中でどの機能がより多くの範圍を占めどの機能がより僅かの範圍を占めるかは、目的とする效果を得るために克服すべき困難の大小によつて定まる』――を解して、大熊氏は『困難の大小』を配分さるべき勞働量の範圍となし、從つてこれは同義反復なりと斷じ、マルクスを救ふ唯一の道は『利用上の效果』なる言葉の積極的な解釋であると論じて、勞働の配分量を規定するものは『困難の大小』ではなく『目的とする效果』であると結論するのである。大熊氏は第一に、『克服すべき困難の大小』なる言葉の解釋に於て誤つてをられる。私見によれば『克服すべき困難の大小』とは、大熊氏の解する如き勞働配分量の各範圍ではなく、生產物一個當りの技術的必要勞働時間を意味するものに外ならぬ。從つてそれは同義反復ではないと思ふ。各部門への勞働配分量と、生產物一個當りの技術的必要勞働時間とを混同することは甚だしき誤りであつて、この誤謬はロビンソンを論ずる間はさほど目につかないが、一度び論を社會に移す時には直ちに重大なものとなつて來る。蓋し、各部門への勞働配分量は社會的欲望範圍に依つて決定されるが、各貨物生產の爲めの技術的必要勞働時間は、社會的欲望とは獨立に、生產力の發展に依つて決定せられるからである。ロビンソンの活動諸部門に配分さるべき勞働範圍の大小を決定するものは、『目的とする利用上の效果』であると解釋することに依つて、マルクスを同義反復より救つたと云はるゝ大熊氏は、かゝる混同を行つた爲めにマルクスを同義反復に陷れるものと誤解し、更にマルクスに於ける配分理論の極限をも見出したのである。勞働配分を決定するものは『利用上の效果』であると云ふのは良い。然し乍ら、『利用上の效果』は終局的のものではなく、更らにこれを規制するものは『克服すべき困難の大小』に外ならない。從つて『克服すべき困難の大小』こそ終局的決定者であつて、これが社會的欲望體制を決定し更に、勞働配分をも規制するものである。かくの如き積極的解釋によつてのみマルクスは眞に救はれるものと思はれる。

社會の生產諸力の發展は社會的必要勞働時間を變化せしめ、この終局的規制者の變化は勞働配分の變化を惹起せしめずには止まぬ。勿論、生產力が各生產部門に於て均衡的に發展する限り、勞働の比例的配分に變化を生ずることは無い筈であるが、事實に於いては發展は常に不均衡的である。從つて生產力を發展的に見る限り、勞働の比例的配分も可動的に見ねばならぬ。社會の發展過程

は、かゝる均衡の絶えざる破壞と絶えざる建設の過程である。

以上に於て、吾人は勞働技術的生產諸關係を貫くべき自然法則を考察した。然し、此處に注意すべきは、かゝる考察は一個の抽象であり、自然法則は常に特定の歷史形態の衣を纏つて現象するものであるといふことである。『自然法則は總じて揚棄され得ざるものである。歷史的に異つた狀態のもとで變じうるのは、かの法則が自らを貫徹するところの形態のみである』。社會的生產諸關係は生產諸力の發展段階に應じて、その特質を變ずる。しかも、常に此特殊形態は彼の自然法則を以て貫かれてゐるのである。社會が存續し得んが爲めには、此法則はまがりなりにも貫徹されねばならぬ。自然法則と歷史的形態との間に矛盾、衝突が生ずる時、勝ち殘るものは前者であつて後者ではない。即ち、自然法則は古き現象形態の殼を脫して新しき現象の仕方を取る。

マルクスの自然法則は、アダム・スミスの自然的調和の思想とは本質的に異る。それは潛在的假說として前提されたる『見えざる手』ではなく、自然法的思想の影響に依つて與へられたるものでもない。マルクスは歷史的諸形態を觀察することに依つて、その形態を貫徹すべき法則—社會的生產の存立せんが爲めの不可缺の前提—を見出したに過ぎない。そして何れの社會に於ても、社會的再生產が續行せられてゐる限り、その續行の前提たる自然法則が何等かの形態を取つて貫徹されて居らねばならぬと云ふに止まる。彼はこの法則を以つて、子供でさへも知る自明の理であると考へるが故に、これを暗默の裡に前提するのである。しかも、スミスに於ける如く、歷史形態を以て永久的形態となすの誤謬に陷ることなく、歷史形態は飽までも歷史形態として把握し、自然法則は夫々異つた仕方に於て、歷史的諸形態を貫くものであることを充分認識してゐたのであつた。

附記

以上に於いて、自然法則それ自身を考察した吾人は、この自然法則が、資本則社會に於いて取る歷史的形態を吟味し、とれよりマルクスの勞働價値說を考察すべきところに到達したのである。紙數が意外に嵩み、愈々本稿の主題に這入るところで、殘りの部分を掲載し得なくなつたことは遺憾であるが、他日、これを補ひたいと思ふ。